エゾリスのごんと エゾシマリスのるこ

ぶん・え　あおき としえ

sample

秋も　ふかまったある日　森のなかを　いそがしそうに
エゾリスのごんが　はたらいています。
冬が　やってくるまえに　木の実を　たくさんあつめます。
このきせつ　リスたちは　冬のあいだの　しょくりょうを
さがしあつめているのです。

sample

エゾリスのごんは　とてもじょうずに
木から木へ　とびうつります。

ある日　木のうえにいた　ごんは　いつもは　みかけない
エゾシマリスを見ました。

ごんは　木から　ササッとおりて　「やあ！」と
こえをかけました。

sample

ふりむいた　エゾシマリスは　ちいさなあしで　木の実を
かれ葉で　かくしました。
ごんは　クスッとわらい
「ボクは　ごん。きみの　木の実を　とったりしないよ。
ねえ　きみの　ホッペ　おおきいんだね。」と　いいました。
すると　エゾシマリスは　くちから６こも　どんぐりをだして　こたえました。
「ボクは　るこ。ほほぶくろに　いれてあったのさ。」
「へえ　ほほぶくろか・・・。」
めを　まるくして　ほっぺをみている　ごんに
「ねえ　きみも　冬眠するんだろう？」と　るこがききました。
「ボクは　冬眠は　しないんだ。でも　冬は　きらいさ　さむいのは　にがてなんだ。
だから　樹のうえにある　巣のなかにいるほうが　おおいんだよ。」と
ごんは　いいました。
るこは　はじめてあった　エゾリスのはなしを　しんけんにききました。
そして　おきにいりのばしょに　ごんをさそいました。

sample

sample

ふたりは　コクワの木にやってきて　えだに　なかよくならんで　すわりました。
コクワの実を　たべていると　るこの　なかまが　とおりかかりました。

sample

「るこ　なにやってるんだよ。みんな　しょくりょうあつめで
いそがしくしてるっていうのに。
冬のあいだ　しょくりょうが　なくなったって　しらないぞ!!」

るこの　なかまは　そういうと　森のなかへ
はしりさっていきました。

sample

ごんは　ためいきをついて　いいました。
「ごめんね　ボクが　こえをかけたから。」
るこは　コクワのみを　たべながら　「いいんだよ　さそったのは　ボクだよ。
それに　きみと　はなしがしたかったんだ」と　ニコッとして　いいました。

ごんは　なんだか　うれしいきもちに　なりました。
「雪(ゆき)が　ふるまで　いそがしいね。また　あえるといいね。」
ふたりは　そういって　わかれました。

sample

ごんも　るこも　まいにち　おおいそがしです。
やがて　森(もり)に雪(ゆき)が　ふりはじめました。
ふたりは　さむくて　ながい冬(ふゆ)にそなえて　木(き)の実(み)や　タネを　ちちゅうにうめたり
巣穴(すあな)に　はこんだり　いっしょうけんめいでした。

ごんは　冬(ふゆ)のあいだ　冬眠(とうみん)をしないので　雪(ゆき)のしたに　うもれてしまう　木(き)の実(み)を
とりやすいように　ちちゅうに　うめていました。

そして　るこは　あつめた木の実を　巣穴に　はこんでいました。
でも　かくしておいた　木の実が　なんこも　なくなっていたのです。
あっちをさがし　こっちをさがし　てが　つめたくなっても　がまんをしてさがしました。
いつのまにか　雪がふりだし　あっというまに　森は　まっしろになりました。
ほかの　エゾシマリスは　冬眠に　はいったのか　あうことがなくなりました。
るこは　ひとりぼっちになったことに　きづくと　きゅうに
ふあんになり　さみしくなってきました。

sample

sample

そんなとき　樹(き)のうえから・・・
「るこじゃないか！！」と　こえがきこえました。
るこは　せなかが　のけぞるほど　せのびをして　うえをみました。

「ごん！!」　るこは　からだが　ホワ～と　あたたかくなるかんじがしました。

sample

ごんは　サササッと　おりてきて　るこの　からだに
かかっている雪(ゆき)を　はらってあげました。
るこが　まだ木(き)の実(み)を　さがしていることをききき
ごんは　ちからになろうと　おもいました。
るこから　巣穴(すあな)のばしょをきき　ふたりで　その巣穴(すあな)まで　はしっていきました。

巣穴(すあな)につくと　ごんが　いいました。
「もうさむいから　なかに　はいりなよ。
ぼくが　木(き)の実(み)を　さがして　もってくるから。」
「いいんだよ　いかないで。
すこしくらい　たりなくても　へいきさ。」と　いいました。

「だいじょうぶだよ。ぼくが　くるまで
そとにでちゃ　ダメだよ。」
ごんは　そういうと　林(はやし)のおくに
はしっていってしまいました。

sample

sample

「ごーん　ごーん」　るこは　しんぱいで　たまりません。
だって　このきせつ　リスは　キタキツネや　タカに　おそわれることが　おおいのです。
冬になると　からだを　かくしてくれるくさが　雪に　うもれてしまい
みつかりやすいのです。
るこは　巣穴を　でたり　はいったり　ごんのことが　しんぱいで
じっとしていられませんでした。

そんなとき　ごんは　森のなかで　つもった雪を　一心不乱に　ほっていました。
雪のしたの　ちちゅうから　木の実を　ひとつとりだし
ふたつとりだし　るこのために　むちゅうになっていました。
しばらくして　ごんの　からだに　パサパサと　雪がおちてきました。
ごんは　ハッとして　木のうえを　みあげました。

sample

雪(ゆき)ぐもが　ひろがる　おおきなそらを
タカが　「みつけたよ」と
いっているように　とんでいます。

sample

ごんは　いそいで　木(き)のみきにかくれ
ジッとしていました。
タカは　あきらめたのか　ほかに
なにかをみつけたのか　どこかへ
とんでいきました。
ごんは　ホッとして　からだから
ドキドキが　ぬけていくのが　わかりました。

あぶないことがないのを　たしかめると　ちらばった木の実を　ひろいあつめ
こわきにかかえて　るこのまつ巣穴へ　いそいでむかいました。

sample

sample

そのころ　るこは　ごんのことが　きになり
巣穴のそばで　いったりきたり
おちつかないでいました。
サク・・・　サク・・・
雪のうえを　あるくおとがしました。

るこが　おとのほうをみると　とおくで
キタキツネが　なにかをさがしながら
ウロウロと　ゆっくりあるいているのを
みました。
るこは　いそいで巣穴にもどり
『ごんが　みつかりませんように・・』と
いのりつづけました。

sample

sample

やんでいた雪(ゆき)が　またチラチラと　ふりだし　それがしだいに　ぼた雪(ゆき)にかわりました。

キタキツネは　のそのそとあるき　ひとつためいきをついて
ブルブルッと　からだをゆらして　せなかにつもった雪(ゆき)を　はらいました。

そして　いそぎあしで　どこかへはしりさりました。

sample

るこは　こわさで　ふるえるからだを　ゆっくり
しんこきゅうをして　おちつかせました。

るこは　林(はやし)の　むこうをじっとみて　ごんを　まちました。
いつのまにか　雪(ゆき)はこぶりになり　とてもしずかで　こわいくらいです。

sample

どれくらいたったでしょう・・　林(はやし)のおくから　ごんのすがたがみえました。
るこは　ほっとして　ちからがぬけるようでした。

sample

sample

ごんの　くちには　チョウセンゴヨウの実　こわきには　ドングリを
たくさんかかえて　かえってきました。

るこは　ごんの　すがたをみて　とてもむねが　あつくなりました。

sample

るこは　なきながら　なんども　おれいをいいました。

「なくなよ　るこ。春(はる)になったら　また　きっとあえるよ。
ことしの冬は　るこのおかげで　春(はる)をまつたのしみができたよ。またあおう。」

「ごん　君(きみ)にあえてうれしいよ。ぼくは　ごんのように
やさしくて　つよくいきるようにがんばるよ。
げんきでいてね　またあおうね。」

sample

ごんは　てれたように　「じゃあね　るこ。」というと　林(はやし)のなかをかろやかに
はねるように　はしりさっていきました。
るこは　なんども　「ありがとう」といい　おおきく　てをふりました。

とてもさむくて　とてもながい冬が　はじまりました。

るこは　雪にうもれた　巣穴のなかで　春をまちます。
なんにちも　なんにちも　ねてすごします。
ときどき　目がさめると　そとは　どうなっているのかと　きになります。

木の実をかじっては　ごんのことを　おもいだします。
『げんきに　してるかな？』と　ごんのことをきにかけては
ウトウトと　またねむりにつくのです。

sample

sample

冬眠をしない　ごんは　あさはやくから　ひとしごと。

ちちゅうに　かくしておいた木の実を　ほりだしています。
しょくりょうさがしは　あさのうちに　おわらせます。

ようやくみつけた　木の実をかかえて　いそいで樹のうえにある　巣にもどります。
グズグズしていると　たいへんです。
キツネや　タカが　くるまえに　巣にもどらなければいけません。

しょくりょうを　もちかえったあとは　のんびり巣のなかで　すごします。

さむいさむい冬は　ごんも　にがてです。春が　まちどおしい　ごんです。

sample

sample

sample

ながい冬が　おわるころ　リスたちが　とりわすれた　木の実や　タネは
やがてくる春に　めをだして　すこしずつ　すこしずつ　森をつくっていくのです。

sample

雪が　とけだし　春をよぶ　きいろい　ふくじゅそうのはなが　さくまで　もうすこし。
春は　やさしく　やってきます。

森の　なかまたちのこえが　あっちからも　こっちからも　きこえてくるでしょう。

そして　ごんと　るこが　またどこかでであい　たのしいじかんを
すごせるきせつが　もうすぐやってくるのです。　おわり

いしだえほん No.0070

エゾリスのごんとエゾシマリスのるこ

2018年10月5日　初版発行

文・絵　あおきとしえ

印刷・製本・発行　石田製本株式会社
〒063-0836 北海道札幌市西区発寒16条14丁目3-31
TEL 011-676-4520
http://i-bb.co.jp/

sample

©2018 Toshie Aoki / Ishida Bookbinding

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、
著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での
利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁はお取り替えいたしますので、弊社までご連絡ください。

ISBN978-4-909377-69-2

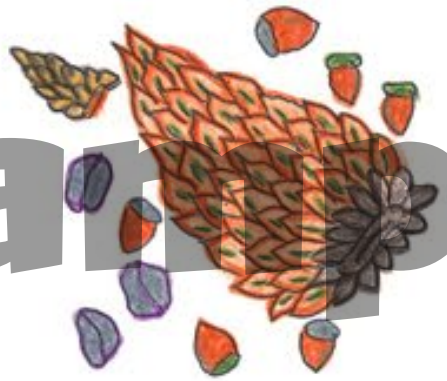
石田製本の直販サイト「いしだえほん」にて、
シリアスな物からシュールな物まで、楽しい絵本が続々発売中です！
http://p-books.jp/ehon/

ISBN978-4-909377-69-2
C8771 ¥1200E

定価：本体1,200円+税

9784909377692

1928771012000



sample